

令和2年度 第1回気候変動検討部会 議事概要

日 時 : 令和2年8月25日(火曜) 15:00~17:00

場 所 : 大阪府西大阪治水事務所

出席者 : 委員) 杉村委員・高橋委員・中北委員・森委員 計4名

まとめ

(1) 気候変動を踏まえた設計外力について

- d4PDF(20kmNHRCM)データを直接活用し、最低中心気圧、高潮経験予測式により算出した潮位偏差結果を用いて、再現年数を比較することは問題ない。
- d4PDF(20kmNHRCM)における年最低中心気圧を補正する際に、国委員会で整理されたd4PDF(60kmAGCM)のバイアス補正值を用いているが、モデルが違うので見直す必要がある。
- 将来気候における潮位偏差の算定方法の違いによる計算結果の違いについて、モデルの違い、シミュレーション上の課題等について整理し、どの算定方法が妥当かを整理すること。

(2) できるだけ手戻りのない設計の考え方

- できるだけ手戻りのない設計の考え方の大枠は、先行型対策、順応型対策の検討フローで整理できている。
- 気候変動への対応として2段ゲートを採用することは良いが、津波対応としての信頼性は重要であり、操作性や操作方法について整理しておくが良い。
- 4℃対応は場合によっては生じないかもしれない。現在の技術における対応を検討したが、将来の技術革新への期待等を整理しておくが良い。

(3) これまでの審議結果の整理

- 審議会規則第6条に基づき、本部会において答申をとりまとめていく。
- 手戻りのない設計の考え方の話であった操作性に配慮することが大事だという点は加えておくほうが良い。
- 気候変動シナリオによらず、約30年後には2℃上昇が生じる可能性があり、世紀末に2℃上昇が生じるのではないということを共通認識としておきたい。

⇒次回以降、いただいた意見を踏まえて整理を進め、答申をとりまとめていく。

主な確認事項、委員意見等

(1) 気候変動を踏まえた設計外力について

- d4PDF(20kmNHRCM)における年最低中心気圧を補正する際に、国委員会で整理されたd4PDF(60kmAGCM)のバイアス補正值を用いているが、モデルが違うので見直すべき。
- 本審議会で整理したd4PDF(20kmNHRCM)における年最低中心低気圧と、国委員会で整理されたd4PDF(60kmAGCM)の年最低中心低気圧が異なる要因について整理しておいたほうが良い。
- d4PDF(20kmNHRCM)データを直接活用し、最低中心気圧、高潮経験予測式により算出した潮位偏差結果を用いて、再現年数を比較することは問題ない。
- d4PDF(20kmNHRCM)データを直接活用し「高潮の経験的予測式で算出した潮位偏差」、「高潮の経験的予測式で最大の潮位偏差となった台風データを用いて高潮シミュレーションを実施した際の潮位偏差」、「想定台風に将来の気候変動を考慮し高潮シミュレーションを実施した際の潮位偏差」を比較し、計算結果の違い・要因をわかりやすく整理して、どの計算結果を妥当とするか整理したほうが良い。

(2) できるだけ手戻りのない設計の考え方

- 気候変動に対する扉体高さへの対応として、2段ゲートを採用することは良い。
- 津波対応としての信頼性は重要であり、操作性や操作方法について検討しておくことが良い。
- できるだけ手戻りのない設計の考え方の大枠は、先行型対策、順応型対策の検討フローで整理できている。
- 気候変動への対応は、基本的には未来変動で考えておいて、その時の条件によっては対策方法変更するなど、将来のオプションを残しておくことも大事。
- 4℃対応については、生じない可能性もあるため、現在の技術で検討した場合の結果と、こういった技術革新があれば、一気にコストダウンできる可能性があるみたいなところを文面で残しておくことが良い。

(3) これまでの審議結果の整理

- 審議会規則第6条に基づき、本部会において答申をとりまとめていく。
- 手戻りのない設計の考え方の話であった操作性に配慮することが大事だという点は加えておくほうが良い。
- 気候変動シナリオによらず、約30年後には2℃上昇が生じる可能性があり、世紀末に2℃上昇が生じるのではないということを通識としておきたい。